

## 「ハイデルベルク・ストラスブール派遣参加報告書」

京都大学文学部 2年 立石和奏

今回の海外渡航は私にとって2度目のヨーロッパで、どこことなく懐かしさを感じた一方で、新しいことに溢れた一週間でもあった。その中でも特に印象に残っている出来事は二つある。

一つ目は、いくつかの価値観の違いである。まず、色々なレストランを訪れたが、どのお店にもヴェジタリアンメニューがあった。日本ではヴェジタリアンメニューを見たことがなかったため驚いた。日本でも少しずつハラルのお店などが増え、多様な食性が受け入れられるようになったと思うが、まだまだ閉鎖的な部分があるのかもしれないと感じた。また、次に驚いたのが結婚に対する考え方である。ストラスブール大学のシャル先生は日本のフェミニズムについて研究されており、お話をさせて頂く中で結婚についての話がでた。カム先生が日本の結婚式場に「人生で最も大切な日」と書かれた幕がかかっている、と話すと、シャル先生は「本当に？信じられない！」と非常に嘆いていた。最初はその意味が分からなかったが、確かに、人生で一番大事な日は必ずしも結婚ではないはずなのに、それに違和感を覚えないほど知らず知らずのうちに固定観念を持っていた。そのような点においても海外に出たり、まったく異なる背景の人と交流したりすることは非常に大切だと思った。

二つ目に心に残っているのは、ストラスブール大学やハイデルベルク大学の学生とのワークショップである。ストラスブール大学でのワークショップでは日本語で発表を行った。私は、普段学校で発表するとき、文章が長くなりやすく、もっと要点を絞って簡潔に話せるようになることが課題であった。今回の発表の中で、日本語 native でない学生に理解してもらえるように文章の長さや例の挙げ方などを工夫したことで、その課題が少し改善されたように思う。また、質疑応答の中で、まったく思いつかなかった視点をもたらうことができ非常に良かった。ワークショップの後に、ストラスブール大学の学生と一緒に夕食をとったが、学校やアルバイトの話など様々な話をし、友達になることができたことがとても嬉しかった。ハイデルベルク大学のワークショップはストラスブール大学の時よりも発表者も多く、発表後のディスカッションの時間が長かった。ハイデルベルク大学の院生は一人30分も発表しており、その内容に自分との圧倒的な差を感じた。今回の私たちの発表も決して手を抜いたわけではなかったが、参考文献の収集や全体の流れが甘いところがあった。また、質問を予想して準備していなかったので、質疑の際にははっきりと回答することができなかった。まだまだ未熟であることを痛感させられ悔しかったので、私ももっと内容のある発表ができるように勉強していこうと思った。一方で、このような海外研修の経験を重ねる中で、英語でのプレゼンテーションやディスカッションに少しずつ慣れ、議論の流れを掴んだり、自分の意見を伝えたりと、できることが徐々に増えてきたように思う。学術面だけでなく日常会話においても徐々に恥ずかしがらずに英語で会話したり、初対面の人とも交流したりすることができるようになり、自分の人間関係や世界が広がっていくのを感じた。また、2つの大学でのワークショップや学生交流の中で共通して感じたことは、3か国語、4か国語話せる人が大勢いることだ。日本では、日本人とは日本語で、外国人とは英語で、という使い分けが多い印象だったので、同じ人とTPOに合わせて媒介言語を変えることに非常に驚いた。しかし、改めて考えてみると、言語はコミュニケーションのために存在しているのだから当たり前なことだと気づかされた。私は、英語は、そのような目的で勉強していたが、第二外国語であるドイツ語は、勉強すること自体が目的で、習得したときの学術面や就職面の利点を気にしていたが、しかし、そうではなく、ドイツ語でコミュニケーションをとりたい、という想いだけで勉強しても良いのだ、と知って気持ちが軽くなったと同時に、ドイツ語の勉強に対する意欲も高まった。

この研修を通して私が一番良かったと感じていることは、留学や研究に対する意欲が高まったことだ。海外で研究されている様々な先生方や学生と出会えたことで、非常に刺激を受け、憧れを抱いた。今までは、留学したいと思いつつも、語学やお金、単位など他のことで不安がぬぐえず、なかなか大きく行動することができなかったが、何よりも大事なものは、学びたい、という想いであることを知った。また、留学している学生や様々な国を渡ってきた先生方に共通して感じたのは、視野が広く、価値観が寛大であること、そして、みんな生き生きと研究していることである。海外にでるということは、もちろん大変なことも多いけれど、それだけ得るものも大きいのだと、彼らの姿から改めて気づかされた。私は、今年の春から地理学専修に所属し、特に自然地理学を学びたいと思っている。ドイツは自然地理の父と言われるフンボルトの生まれの地であり、ハイデルベルク大学だけでなく、他の大学にも歴史ある地理学の研究室があることを知った。これから、英語だけでなくドイツ語でも講義が受けられるように勉強を重ね、是非ドイツに留学したい。その際にさらに有意義な時間が過ごせるよう、語学だけでなく、専門分野の知識も可能な限り習得していきたいと思う。

最後になりましたが、引率して下さったカム先生、橋本さん、横田さん、現地でお世話になったストラスブール大学、ハイデルベルク大学の教職員、学生のみならず、準備等に協力して下さった国際交流推進室の方々、その他この研修に携わって下さったすべての方々へ厚く御礼申し上げます。このような経験をさせて頂いたことに本当に感謝しております。どうもありがとうございました。